

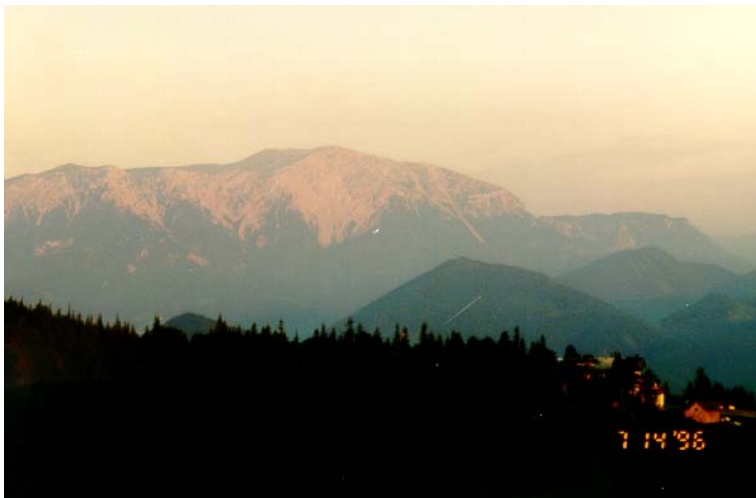
## 1.5. ウィーン便り (5) —— 国際原子力機関 ( I A E A ) に勤めて：こぼれ話 (2001.10) ——

日立事業所燃料サイクル部 小西俊雄

日常の「公」「私」の生活からエピソードを拾った。

- ・ウィーンの水について

ウィーンの水は美味しい。日本人も安心して生水が飲める。この美味しい水を市民が手にしたのは一世紀余り前である。十九世紀半ばのウィーンでは清浄な飲料水が不足しコレラやチフスが蔓延していた。シューベルトも不衛生な水が原因で死んだ。一〇〇km南のアルプスから馬で六〇時間かけて毎日水を運んでいた。一日四、五割しか使えなかった。高層アパートのトイレもままならず夜陰に乗じて排泄物を窓から路上に処理していたらしい<sup>1</sup>。ウィーン市近代化の一環としてアルプスからの送水路建設が決まったのは十九世紀半ば過ぎ。水源はハプスブルク家御用達の泉カイザーブルン。リングシュトラッセ開通を祝って皇帝フランツヨーゼフが市民に開放した。これによって使える水が一举に十倍になり、衛生環境は格段に



(朝焼けのシュネーベルク山塊)

向上した。送水路は一八七三年完成。現在日量約二十万トン、送水時間約二十時間、途中の温度上昇二度でウィーンまで持って来ると言う。二十世紀になって第二送水路が建設される。二〇〇km。現代のウィーンは一人一日あたり約二五〇割の生活用水を消費している。ウィーンの水源地は殆どがアルプスからの雪解け水である。ウィーンの森やシュネーベルク山塊を歩くと「水源保護地区」の標識によく出くわす。

- ・無札乗車の罰金 (一九九八年十月)

ウィーン市の交通はタクシー以外全て市営で、乗車券は共通である。私は年間定期を利用している。しかし、駅には自動パンチ機のみで無人で自動検札機もない(写真)から、定期券の存在そのものを忘れ勝ちになる。無札乗車はいいわけ無しで罰金である。月間定期券に相当する額を払わされる。

注意はしていたのだが、かばんを取り替えた日にこれをやってしまった。検札員が乗り込んできた瞬間に気付いたが遅い。「国連職員が無札乗車」というのも見つともない



が、観念して罰金を払った。そのことを自虐気味に知人に話したら、「年間定期所有者には罰金を払い戻してくれる」と言う。半信半疑で交通局に出かけたらどうも本当らしい。「罰金払ったのが私本人とどうして分かるのか、第三者がこの罰金証書を拾ってきている可能性もあるのに」と思った。尋ねると「本人

<sup>1</sup> 「最初の水洗トイレ」が都心のグラーベン通りに完成するのは一九〇五年である。

と認定した上で払う」とのことで、時間や場所、検札員の風貌等を聞かれた上で全額もどしてくれた。ありがたいものだ。これは、年間定期が顔写真付きで本人同定が可能だからだそう。月間定期や回数券にこの救済措置はない。

・スエズ運河の橋工事現場（二〇〇〇年五月、）

二〇〇一年四月、「日本の経済産業大臣を迎えてエジプトでスエズ運河を繋ぐ橋の連結式挙行」とマスメディアが伝えた。このプロジェクトには個人的関心もあって内心快哉を叫んだ。

二〇〇〇年五月。三度目のカイロ。仕事を終えた週末に、東へ約一〇〇kmのこの架橋工事現場を訪ねた。



実はその一ヶ月前の旅行先で知り合った日本人の招待である。現場副所長の方だった。中東和平活動の一貫として運河に架かる初めての橋だそう。今はフェリーが唯一の往来手段。日本が中東和平への協力を工事参加の形で表していた。工事現場は運河の中央部、周辺にはかつての中東戦争の傷痕を残している。記憶を忘れないようにと戦車の残骸が記念碑として残してある。橋の完成で交通量は飛躍的に増大する期待が大きい。その橋工事を日本が担当していることが誇らしかった。日本の建築ジョ

イントベンチャーが橋脚中央部分を請け負って工事進捗率ほぼ七〇%。橋脚の高さ七〇mは本四架橋をしのご世界最高だそう。橋の両サイド、陸上部分は地元企業が担当である。

同行の韓国人部長、仕事相手先の社長も行きたいと言うので電話で了解を得て出発した。前夜は社長の別荘に泊まることになった。紅海沿いにある会員制コンドミニウムの外観は快適そうだった。が、内部はそうでもなかった。深夜、「蚊」に悩まされる羽目にあった。こちらは無防備だった。同室の部長は下着を振り回して壁を叩き、「収穫\*\*匹」と壁の血痕を指して翌朝の朝食時に自慢だか不満だかをぶちまけていた。私は眠い方が勝って、毛布を被って暑さに耐えていた。隣室で社長は高いびき。この社長はエジプトで初の原発建設を計画する公社の社長だが、内外企業の連携の面で参考になると喜んでいて。日本の技術力、海外協力を実地に見せるという、予定外の収穫のある現場訪問だった。

・公務出張も万事平穏とは限らない。

一九九九年春、北京。会議参加者の一人が予定の日に着かない。モスコアでの乗り継ぎに失敗したとの連絡をよこして彼は姿を消した。「行方不明」である。ロシア人参加者の助けを借りて探したがわからない。派遣元に連絡をとっても分らない。五日後、会議が終わってホテルを引き払った直後、ファックスが届いた。「乗り継ぎ便がなく、ロシアのビサを取得していなかったので空港内に缶詰だった、連絡もとれなかった、会議に間に合わないのでモスコアから真っ直ぐ帰国した」

私自身の「乗り遅れ」もある。ある朝、出張のためウィーン空港へ向かう電車が工事のため「振り替え輸送中」であることを知らずに乗り遅れた。「大事な開会式に間に合わない」と焦った。泣き付いて午後

の代替便に乗せてもらって数百m隣の町へ飛び、通じぬ言葉で苦労しながらバスを数時間乗り継いで深夜二時に投宿した。予定便で出迎え損なった相手は、「開会はI A E A抜きで」と覚悟していた。が、朝

定刻に顔を出した私に、「そこまでして間に合わせるとはさすがに日本人」と驚き妙に感心された。

会議参加者には原則として旅費を I A E A が支給する。ウィーン以外での会議の場合、担当職員つまり私がそれを持参する。運ぶのは現金または無記名の旅行小切手である。国によっては入国時に「持ち込み金」現物検査があり、その税関検査ゲートが衆人の目の前であったりする。「別室での検査」を要請するのだが、言葉が通じないと手間取る。会議参加者に支給して、受取りのサインをもらってようやく職員は「リスク」のストレスから解放される。幸い今のところ無事故である<sup>2</sup>。

#### ・二度目の晚餐（一九九七年春）

これは旅先での失敗談。初のカイロでの会議は土曜日で終了し、翌日曜が空いていた。会議のあとホスト役の一人が、「明日カイロの街を家内と一緒に案内する、九時に迎えに行く」と招待してくれた。もちろん喜んで受け入れた。翌朝楽しみに待ったが十時になっても彼は現れない。「アラブ人は約束の時間にルーズ」と不満を覚えつつも単独で出掛けることとし、タクシーで観光地をまわり、ホテルに戻ってシャワーのあと夕食に出た。残ったエジプトの金を全て使う覚悟で中華レストランの晚餐を楽しんだ。市中で入手にくいワインも相当頂いて満腹でホテルに戻り、あとは寝る楽しみだけと床に入った。

寝息を立て始めた頃フロントから電話。「来客です」「?」「約束の九時だ、食事に行こう」と言う。キョトンとした。とにかく寝ぼけ眼で下に降りると招待してくれた本人が夫人同伴で確かに待っていた。招待を受けた以上は行かなきゃなるまいと覚悟して一緒したもの、それから二時間、酒抜きのエジプト料理は地獄だった。珍味フォアグラを提供するガチョウの苦しみがわかった。あの辛さは二度と味わいたくない。間違いの理由はあとで知る。カイロはイスラムの世界、日曜日は労働日だったのだ。彼の招待した「九時」は勤務明けの夜の九時で、それを朝の九時と私が早合点していたのだ。



#### ・入院生活（一九九八年九月）

生まれて初めてである。耳下腺腫瘍との診断で全身麻酔と聞いて正直びびった。局所麻酔よりは安全だと聞いても、全身麻酔の手術中に逝った親父が重なった。が、案ずるより産むが易し。いつの間に麻酔にかかったのか知らぬうちに終わっていた。ただ、術後の縫合に不手際があつて、夜になって再度の全身麻酔と手術というおまけがついた。顔面神経を損傷する危険性も皆無ではないと明記した手術同意書に署名させられたが、幸い後遺症もなく退院できた。大事なことから個人部屋を頼んだので費用は嵩んだが、眺めの良い病室生活を楽しんだ。入院当日に届いた知り合いからの手紙が元気付けてくれた。手術後の、知人の和食差し入れが何とも嬉しかった。日本の家内からは毎日慰問の電話が来た。それでもやはり、自由に歩ける健康な生活のありがたさをかみしめた。

<sup>2</sup> ここに記した以外にも旅に関わる話題は多い。[第10編](#)にそれらを集めた。

・マドリッドひったくり事件（一九九九年春）

まさに事件だった。後ろから羽交い締めにされ首を締められ所持品を全て奪われたのである。休暇で訪れた初日にいきなりである。考え事しながらぼんやり地下道（写真）を歩いていて昼日中にやられた。二人組は間もなく拘束されたらしく所持品は後刻殆ど戻ったが、「声」は二ヶ月戻らなかった。締められた際に声帯が損傷していた。それとは知らず、ワインと海鮮料理を楽しみながら旅を続け、一週間後ウィーンに戻って声帯外傷と「失声」の心配を指摘されて蒼くなった。会議でもしばらくマイクフォン抜きでは声が通らなかった（[詳細版](#)）。



幸い後遺症は残らずに済んだが、カラオケが出来なくなるかと一時はかなり落ち込んだ。この遭難記は読者を驚かせた。思い出すのもいやな事件だが、良い面もあった。声帯損傷で「やむなく」三ヶ月の禁酒に耐えた結果、自分で決めた解禁日の酒が何と美味しかったことか。公務のあと立ち寄った東京で、旧くからの知人と会った時のことだった。一杯で酔った。そして、晩酌の量が減ったのを家内は喜んでいる。回復につれて酒量が増えると、「も一度マドリッドへ行ったら？」と笑っている。

・四〇〇〇<sup>3</sup>峰モンテローザ（二〇〇〇年夏）

西暦二〇〇〇年に因み、六十という節目の年齢を迎える思い出として計画したのが初の四〇〇〇<sup>3</sup>峰挑戦だった。目指したのはスイスのモンテローザ。主峰ドゥフルシュピツェ(四六三四<sup>3</sup>)はツェルマツトを基点に八月二日に登頂した（[詳細版](#)）。その四週後オーストリア山岳会の仲間と一緒にイタリア側からも登った。目標は第三峰のズィグナルクッペ（四五五四<sup>3</sup>）。これはきつかった。高度順応を終えて本番の八月三十日はあいにく雪。少し長くなるが、登頂記から引用する（[詳細版](#)）。

(…) アイゼン他を装着して五時半、小屋（三六五〇<sup>3</sup>）を出発。薄い霧。(…) 七時過ぎ、四〇〇〇



<sup>3</sup>峰。(…) 斜面は気が遠くなるほど上へ続いている。うんざりするほど登って尾根に出る。九時少し前、パロットシュピツェ頂上に着く。四四三六<sup>3</sup>。疲れた。休みたい、が(…) ガイドの足は止まらない。引きずられるように歩く。(…) こんなに辛い思いでなぜ山に来るのか、ましてこんな天候で、と自問する。ここから降りてまた登ってあのピークまで行くのかと、一種の恐怖感でぼんやり峠の向こうのズィグナルクッペを見つめる。

(…) 最低部に降りていよいよ最終目標に向け登り返す。疲れが激しくなる。雪も強くなって視界も利

<sup>3</sup> ヨーロッパアルプス第二峰。マッターホルンより高い。第一峰はフランスのモンブラン（四八〇七<sup>3</sup>）。

かなくなる。足が重い。脛脛が攣りそうだ。休みたい。(…) ザイルに引っ張られながら転ばないのが精一杯である。(…) 十時頃。道は延々と続く。(…) 目測では目標の頂上小屋までの道半ば。(…) あそこまでは持たないと弱気になったら辛抱も限界に来た。ついに観念して「ばてた、休ませてくれ」と、しばしの臨時休みを要求して雪面に倒れる。(…) 十時半、このような気持ちでズィグナルクッペ頂上小屋に着く。疲労困憊。この一ヶ月で六座目の四〇〇〇峰だ。目標だったその最後の四五五四峰だが、今は感激するよりただ眠りたい。空腹よりも渴きよりも眠りたい。食堂の長椅子に倒れ込む。「三〇分休んだら出発」と言うガイドの指示が鬼の声のように耳に突き刺さる。

(…) 十一時、疲れも取れないまま悲壮な思いで下山開始。吹雪の中を降りる。風の寒さより、顔をたく雪よりも足の重さが辛い。(…) 意識が朦朧としそうな中で(…) 生を求めて雪原を這うように必死に歩く男の姿を思い出す。あれは「人間の条件」の梶と言ったかな、あるいは「ひまわり」のマルセロ・マストロヤンニか。(…) 今の自分には彼らほど生への強い復帰欲がない。ザイルから離れてこの雪の上で横になったら楽だろうな、そうしたらそのまま死ぬのだろうか。

ただただ物体のような気持ちでザイルにしがみついて吹雪の中を歩く。寒さは感じない。本当に寒くないのか、寒ささえ感じないのか。(…) 自分が疲れて歩いているとすら意識しなくなってしばらく、吹雪の中に構築物らしいものがうっすら浮かんできた。今まで何度か幻想に騙されていたからあまり期待せずに居ると「さあ着いたぞ」とガイド。時計は午後一時を指していた。アイゼン他荷をはずすともう余裕は残っていなかった。(…) ベッドに倒れ込んだ。

・「張り合い」と「定年」(二〇〇一年十月、)

私の職場に「日新月新又年新」の字が掛けてある。拙い自書だが気に入っている。勿論、「日新日々新又日新」(大学)が原典である。「日々に月々に年々に新たなり」が最近の私の座右銘である。

「張り合いの持てる人生は素晴らしく、ありがたいことです。仕事であれ、趣味であれ、人であれ…。」以前、知人宛に書いた言葉である。「張り合い」とは何か。どんな境遇にあるにしろ、それがあから努力の活力が出る、向上心が生ずる、希望が持てる、人生に喜びを感じずる、そんなものではなからうか。人それぞれで形は違うだろうが、「張り合いの持てる人生は素晴らしく、ありがたい」、心からそう思う。

この六年、IAEAで「真水」の仕事に携わって来た。「原子力を利用しての海水淡水化」という新しい課題を通して、日本の原子力開発の中で育った経験を、国連機関の場で生かせることに「張り合い」を感じてきた。そして、この春日立製作所を定年退職した。他人並みに苦楽を伴った半世紀だったろう。社内外の多くの人に感謝し、公私に生かされてきた自分を振り返り、これからの人生を考えている。出会った多くの人が財産であり、これからもその利殖に努めたいと思う。

IAEAの生活はまだ続く。二〇〇三年予定の帰国時に「良かった」と思えるだろうことが嬉しい。「張り合い」を持って仕事人生の終盤を送れる事の嬉しさであり、文化の多様さを再認識して日本の自然、歴史、人への郷愁感を強めたことも嬉しい。「ここも良いけど、やはり日本も良い」と心から思う。それはホームシックとは異なる望郷感である。

(写真) 次ページ



(「行く道」)

中締めに代えて——ばんぼん広場（読者の広場）——

毎号「ウィーン便り」を掲載頂き感謝しております。ウィーンの I A E A に着任して五年余り、日立製作所の定年を一年後に控えた二〇〇〇年春、「何か思い出になること」をと考えていた。相談を持ちかけたある先輩から「珍しい経験だから書き物に」とばんぼん誌寄稿の助言を頂いてここまで来た。連載中幸いにも「次回を期待」の声を聞いた。私自身にとっても楽しい思い出となった。長い間、読ませて貰うだけだったばんぼん誌だった。つたない寄稿が少しでもお役に立てたら、在職三十五年で初めてののお礼である。最初に構想した「ウィーン便り」の大筋は今号で終わった。書き切れなかった話が残っている。その中から、「ウィーン便りあれこれ集」として、肩の凝らない小記事で読者の目を今しばらく煩わさせて頂こうと思う。次回は先ず、ウィーンではないが「南極大陸訪問記」。